



谷津下I遺跡発掘現場

平安時代のものとみられる堅穴式住居跡
ここから須恵器の坏（食器）と壺の底部
が発見された。

原始古代

大字平塚内の谷津下I遺跡の発掘調査が七月二十八日から始まり、現在さかんに発掘作業が行われている。

この遺跡から今までに発見されたものは、今から六千〜四千年前の縄文時代早・中期に属すると見られる土器の破片や打製石斧（工作具または、農耕具として使われたオノ形の石器）をはじめ、住居跡四軒（縄文時代中期二軒、平安時代一軒、不祥一軒）や鉄製の小刀、砥石（時代不祥）のほか、土壙（墓）などが多数発見された。また、市内では初めて登窯（傾斜地に沿って粘土で階段状に築かれ、二千度近い熱を出す窯）が発見されている。

石器の中には、埼玉県内では産出しないとされている黒曜石（火山岩の一種で、切り口は貝殻状になっており、装飾品やナイフとして使用された）と見られる岩石）も発掘されている。

上平地区内で今までに発掘された遺跡は、この谷津下I遺跡のほかに県立東高等学校の建設に伴って発掘された。平塚氷川遺跡と二か所になっている。

上尾市内の遺跡の中には、ローム層の中から石器などが発掘されているものもいくつかある。それらのことから推測すると、今から一万年以上も昔、まだ土器をもたない先土器時代（旧石器時代）から、この地で人々の先活が始まっていたものと考えられる。

二つの遺跡とも綾瀬川の支流付近にあり、台地状の地形をなしている。原始・古代の人々は、このような川や湖沼、あるいは湿地などの自然水の得やすい、日当りの良い台地で集団を作り、生活を営んでいたものと思われる。

発掘された遺跡には、縄文時代・平安時代、あるいは江戸時代などの遺跡・遺物が混在していることから、この地を舞台に狩猟・漁労や草、木の实などの採集生活の縄文時代、そして、稲作が行われるようになった弥生時代・奈良・平安時代へと展開された人々の足跡をうかがい知ることが出来る。

また、埼玉県内では産出されていないといわれている黒曜石が発掘されたことは、産出される長野県などの山岳地域の人々と、物々交換など

の交易が行われていたか、あるいは人的交流がなされていたものと考えられる。

中世

春日氏の家譜に、足利尊氏が与えた次のような下文がある。

花押

下 春日八郎行元

可令早領知武藏國足立郡桶皮郷内

菅谷村丸七事、

右為勤功之賞於富郷之替所元行也者、

早守先例可致沙汰之状如件、

観應三年九月十八日

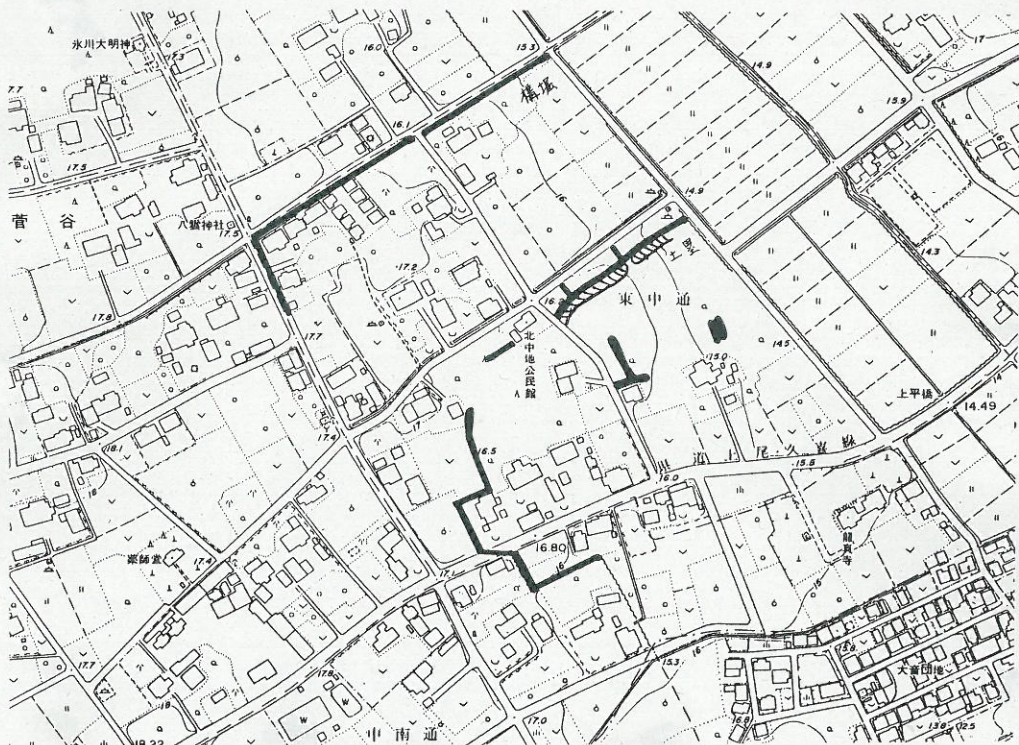
これは、観應三年（一三五二年）に將軍足利尊氏が、桶川郷の菅ヶ谷村を勤功によって春日八郎行元に与えるというものである。

富町時代は、後醍醐天皇を中心とする吉野の南朝方と、足利尊氏を中心にした京都の北朝方の対立がしばらく続いていたが、これらの古文書から菅谷村などこのあたり一帯は、北朝方の支配下におかれていたものと考えられる。

また、古くは菅谷村付近一帯は桶川郷に属していた。江戸時代の文政年間に出された「新編武蔵風土記稿」によっても、門前村・上村・南村・久保村・菅谷村は桶川郷に属していたことが記されている。

現在の北中地公民館付近に菅谷北城址があった。
新編武蔵風土記稿に「凡四方二町余にして、北の方に堀の跡とおぼしきところあり、又この曲輪ともいふべき堀の跡あり、何人の居跡なりや由来詳ならず」と記されている。

「ヤマ（山林のこと）の方に『おしろ（城）』があった」という地元
の伝承もある。現在、区画され、道路がつくられたり、宅地の造成などにより、全容はとらえ難いが山林などに土塁、堀のくぼみなどが残っている。



菅谷北城址

現在残っているカマエボリ（構堀）と土塁

「新編武蔵風土記稿」では、城主に鳩谷修理を想定しているが、春日八郎の居館とも考えられるし、断定することはできない。

堀と土塁が残っていたと思われる現在の菅谷地区



近世

江戸時代初期には、上尾市下陣屋の地に旗本西尾氏が陣屋を構え、五千石の領地を支配していた。五千石の領地から、上平地区あたりもその支配下にあったものと考えられる。二十数年で西尾氏が大名として、常陸の土浦に転封された後は、天領、あるいは岩槻藩の支配、旗本の支配となった。正保のころ、町谷村は柴田筑後守の知行地となり、上村・久保村・南村・須ヶ谷村などは、阿部対馬守の知行地であった。

江戸時代には、産業もさかになり、商品作物も多く栽培されてきて



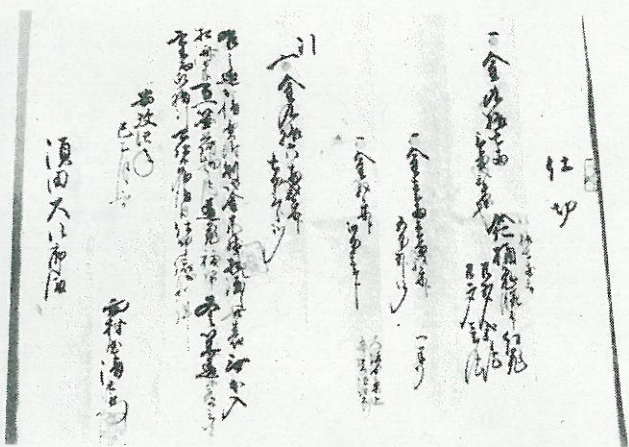
菅谷北城址があったと思われる現在の北中公民館

おり、各地に特産物がでるようになった。この上平村付近では、化粧品や染色原料となる紅花の生産がさかんであった。

この地域で、紅花が栽培されるようになったのは、天明・寛政のころ（一七八一〜一八〇〇年）、江戸の商人柳屋五郎三郎の召仕太助・半兵衛が、上平（現上尾市大字上）の百姓七五郎に種をやり、栽培させたのが始まりのようである。

春時の最上の紅花を、東北地方より温暖な武州の気候にあわせ、秋時にしたり、施肥・防虫など努力を重ね、最上の紅花を武州に定着させたのである。

その後、急速に上尾・桶川地方に紅花の栽培が広まっていき、生産量だけでなく、品質の上でも全国屈指の紅花の産地となった。そして、この多くは、南村の須田治兵衛家の仕切書などからわかるように、京都の紅花問屋などと取引がされていた。



紅花の仕切書
(須田家文書の中から)



久保のバス停付近

交通もさかんになり、中山道も五街道の一つとして整備され、上尾宿桶川宿など宿場として栄えていた。

「上尾宿から次の桶川宿までは三十四町（約三・八キロ）この間に立場一か所。久保地内にある。」と江戸時代の書物に書かれている。

上尾宿は、町並みが十町十軒で、現在の十町一丁目と二丁目の境あたりから愛宕神社の付近までであった。宿場の中心は、現在の氷川御神社あたりになっており、高札場・本陣・脇本陣・問屋場など重要な施設はこの付近に集まっていた。

上尾付近からのながめは美しく、右に筑波山・日光山、左に富士山・秩父山が見え、風物景観が開けていた事が「中山道宿村大概帳」に記されている。

上尾宿と桶川宿のほぼまん中の所に立場がおかれていた。現在の久保のバス停付近にあたり、この一角にある黒塀の旧家を「立場の須田さん」などという名で今でも呼んでいる。立場というのは、宿場の出入口にあたり、人足やカゴかきや、馬などが休息するところでした。また、かけ茶屋などもあって、一般の旅人なども利用したものです。

明治時代になって廃止されたが明治四年（一八七一年）東京万世橋から高崎間を往復する乗合馬車の停留所がここに置かれていた。

宿場には、規定の人馬が常備されていたが、宿駅常備の人馬だけでは不足するようになる。助郷制度が実施され付近の村々から人馬を徴発し役務を負担させた。平塚村は上尾宿の助郷村に、久保村・上村・南村・門前村・須ヶ谷村は桶川宿の助郷に指定されていた。

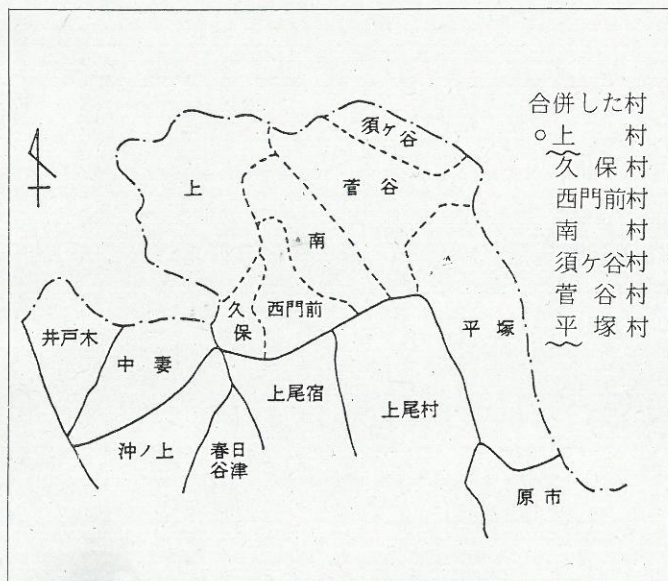
上平村から上尾市へ

明治になり、上尾市付近は大宮県となり、その後、浦和県に名称が変わり、忍県と岩槻県が合併し、明治九年に現在の埼玉県となった。

明治七年に上平塚村・下平塚村が合併し、平塚村となり、明治二十二年には町村制施行により、全国的に町村合併が行われ、上平地区でも、上村・久保村・西門前村・南村・須ヶ谷村・菅ヶ谷村・平塚村の七ヶ村が合併し、上平村が誕生した。

上平の名称は、大きな村である上村と平塚村の頭文字を合わせ、上平村とした。

昭和三十年には町村合併により上尾町になり、昭和三十三年には上尾市となり、現在に至っている。



明治22年合併当時の上平村

昭和三十年の合併当時の上尾町の人口は、三万五千二百八十一人であったが、現在（昭和六十一年九月）では、十八万一千六百十八人になっている。昭和四十五年から五十年の国勢調査における人口増加率は全国一である。首都東京のベッドタウンとして、上平地区でも平塚団地、白小鳩団地などの団地がつくられ、山林や農地が宅地化され、人口の増加が続いている。

山形について全国第二位を誇っていた武州紅花も、明治になって、安価な中国産の紅花やドイツの化学染料が輸入されることによって急速におとろえ、養蚕に変わっていった。また、県内第一の良質の大麦の産地でもあった上尾地域も、近年、近郊農業としての野菜栽培、花の栽培、ナシ、キウイなどの果樹栽培のさかんな地域に変わっている。

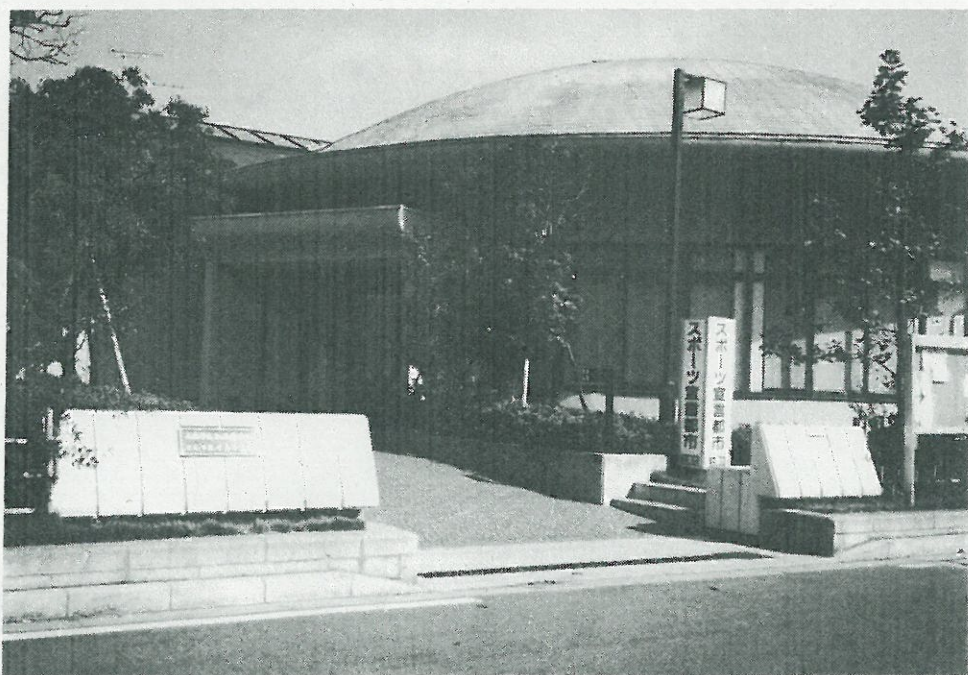
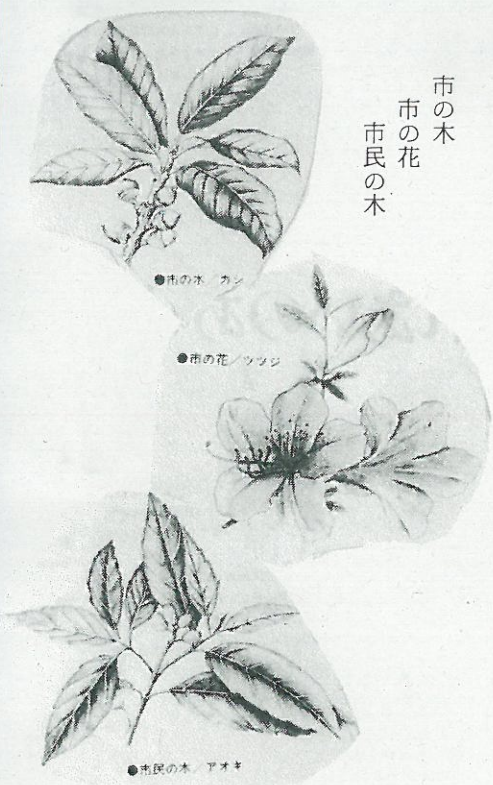
上尾市は、工業生産額が県内第二位をしめ、工業の発展もめざましい。上平地区でも、昭和二十九年に上尾平塚工業団地が建設され、工場が各地につくられている。

昭和六十年五月には、図書館・会議室・体育室などの文化施設を備えた上平公民館がオープンした。これらの施設が文化の源泉として、今後地域文化をますます高めていくでしょう。

市の木

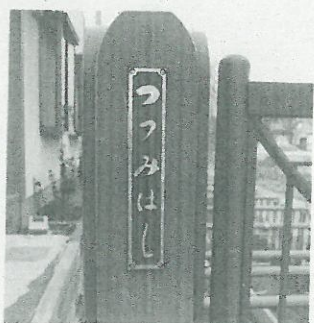
市の花

市民の木



美しく生れ変わった現在のの上平公民館

1. 上平地区の地理（芝川のすがた）



今度上平地区を流れる芝川を紹介することになり、芝川沿いを探索がてらゆっくりと歩いてみました。

芝川の最上流は、桶川市末広2丁目、現在の「ゆーワールド」の近くから発しています、そこから流れに沿って約5km、上尾市福祉会館前の「道三橋」までをあれこれ紹介しましょう。

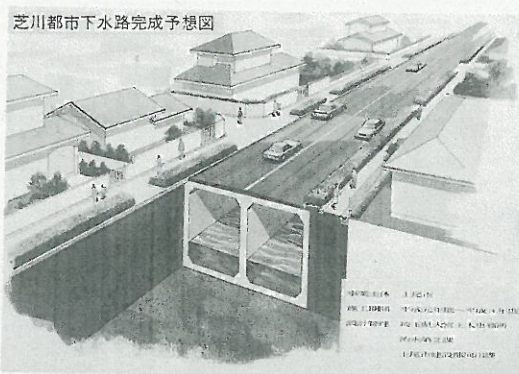
上平地区内を流れる芝川は平成元年から7年にかけて大改修され、ボックスカルバート工法により芝川の流れの上を通路として利用されるようになりました。

そもそも芝川大改修に至った理由とは昭和30年～40年代急速に宅地化が進み環境が変わったことに原因があります。

昭和30年頃の芝川を知る人の話では芝川は3mくらいの川幅で両岸に2m幅の土手が続き、その周りに田んぼが広がって



いたそうです。この田んぼは遊水地の役目を果たしており、台風などの大雨で一気に増した水は田んぼに流れ込み芝川の水がひけるのを待って又、川に戻るといふかわりになっていたそうです。たぶん現在の須ヶ谷地区に来て頂くと、昔の上郷の田園風景をイメージして頂けると思いますが、今の須ヶ谷区内には広い田んぼが残っています。その中央に小川（あやせ川）が流れていて、田植えの頃の風景や初夏の蒼く育った稲は緑のジュータンのように広がり、秋となれば黄金色に染まり、四季を感じさせてくれる田園です。昔の芝川周辺もこのようだったのでしよう。



ところが昭和30年以後、宅地開発が進み芝川には生活雑排水が流れ込むようになり、みるみる汚染されていきました。そこで平成元年から大改修が始まりました。

さて現在の芝川は、桶川市末広2丁目から白小鳩団地北入口の「つつみ橋」までは今も川の姿を残して住宅密集地を幅

6mくらいで流れています。「つつみ橋」横には、かつての芝川を偲ぶ「水親公園」が平成7年に整備されました。

白小鳩団地内と上尾青果市場内では地下を流れ、歩道に姿を変えています。気付くとそこに「中橋」「氷川橋」の名が残されています。「坊ノ下橋」から西門前の地区内は、川の改修と合わせて宅地整備工事中です。JR北上尾駅が昭和63年12月に開業されて通勤に便利な地区とあって、これから発展する地域です。

芝川小学校正門前から「尾平橋」までの区間は車道と赤レンガの歩道、そこにシャラノキ（夏椿で白い花が咲く）街路樹も植えられて、きれいに整備されました。



大改修はこの地点で終わり、「尾平橋」から下流は川幅が広く両岸雑草の茂る川となり流れていきます。「本町橋」から東小学校裏の「一本杉橋」の間、流れは大きくカーブして東小学校の横を抜けていきます。桜の咲く時期にこの地点に立つと、のどかな川の風情があります。さらに流れを追って行くと福祉会館の前の桜並木のある芝川沿いの公園へと下っていきます。

一本の川ですがこうして歩いてみると見る地点により外見が全く違うことに気付かされました。

この芝川を紹介することになって、この川のルーツも調べてみました。芝川は荒川水系の一河川で上尾市・大宮市・浦和市の東部を経て川口領家で荒川に合流する長さ29mある川です。

その昔（1760年頃）ずっと下流の方では見沼代用水へ通ずる船運が開かれ、明治・大正時代までは米・薪・野菜など船によって運ばれていたそうです。芝川の上流に関する昔を偲ぶ書物などは残念ながら見つけられませんでした。芝川にかかる橋の名を調べる中で知ったのが「坊ノ下橋」「中橋」です。「江戸後期の風土記・武蔵國群村誌」に残されているその名の橋は西門前村にあり長さ1間、巾4尺の石造で、川越道にかけられた橋だったそうで、その周辺は遊水地になっていたようです。

芝川の姿も時代とともに環境も変わり姿を替えつつある今、こうして記念誌に残せることは幸福だったかもしれません。皆様も思い出をはせながら芝川沿いを歩いてみてください。



芝川にかかる橋の名とその由来

(上流から5 km)

1. まなび橋：近くに学校があり通学路に利用されている
2. 扇橋：末広の地名から（扇）と命名
3. しあわせ橋
4. 一本橋
5. 末広橋：芝川の西側が桶川市末広1丁目の地名から
6. 長浪橋：東側に小字名で長浪とある
7. つつみ橋：以前は上郷橋と呼ばれていたが小字名で橋をはさんで南側に堤下北側に堤上とあることから改名
8. 中橋：明治の武蔵國群村誌にも名が印されている（西門前村の西方水溜まり、川越道にかけられた石橋）
9. 氷川橋：近くに氷川神社がある

10. 坊ノ下橋：同じく武蔵國群村誌に（西門前村に坊ノ下堀があってその上流の川越道にかけられた石橋）
11. 尾平橋
12. 本町橋
13. 一本杉橋
14. ひがし橋
15. 矢岳橋
16. 岡橋
17. 道三橋

以上が福祉会館前までにかけてられた橋。

- ※注 1、2は平成7年に地元代表者が命名。
3は、平成6年に地元代表者が命名。
6は、平成5年11月地元代表者が命名。
7は、平成4年9月地元代表者が改名。

